

東日本大震災災害活動報告

宮城県七ヶ浜町消防団 団長 渡邊 初男



平成23年3月11日午後2時46分に発生した三陸沖を震源とする観測史上最大規模のマグニチュード9.0の大地震と、その直後に襲来した巨大津波は、東日本の太平洋側を中心とした沿岸部地域に想像を絶する被害をもたらしました。

七ヶ浜町内においても、震度5強の大地震を観測し、地震発生から約50分後に最大で12メートルを超える巨大津波が沿岸部を襲いました。

この未曾有の大震災の七ヶ浜町内における被害状況は、人的被害では死者91名、行方不明者5名、住家被害では全壊が729棟、大規模半壊が243棟、半壊が217棟、一部損壊が1067棟、その他地震と



浸水状況（菖蒲田浜地内）



大破した消防ポンプ自動車（松ヶ浜地内）



自衛隊と連携し船舶撤去（花淵浜地内）

津波の影響で、港湾、漁港、上下水道、建築物、道路等を主とした公共施設の流失や損壊、電柱電線、ガス管等も同様に被災したことにより、ライフラインが数日間寸断されました。特に津波の浸水面積は4.2km²であり、七ヶ浜町の総面積13.27km²の3割以上が浸水しました。

七ヶ浜町消防団に関する被害状況については、消防ポンプ自動車置場兼団員詰所全10施設のうち3施設が津波により流失し、消防ポンプ自動車も全10台のうち2台が大破し、消防団員においても水門閉鎖や避難誘導等の活動中に2名の尊い命が犠牲となり、負傷者も7名を数えました。

この過酷な状況の中、七ヶ浜町災対本部との唯一の通信手段である消防ポンプ自動車の車載無線を生命線とし、様々な活動を行いました。

まず、地震発生直後大津波警報及び町内沿岸部世帯に避難指示が発令されたことで、いち早く沿岸部の水門閉鎖と住民に対して避難指示の広報及び避難誘導を行い、地域によっては自主防災会の方々と連携し、要援護者の避難介助も行いました。この時点では地震による犠牲者はいなかったと思います。

七ヶ浜町災対本部から伝達されていた、当初の津波到達予想時間（仙台港午後3時10分）を過ぎても潮位変化が確認できなかったため、可能な限

り避難広報と避難誘導活動を継続していると、『強烈な引き潮が確認された！』との情報により全消防団員も一時高台に避難しました。しかし、安心できるはずの指定避難場所に避難したのにもかかわらず、想定外の高さに達した大津波は消防ポンプ自動車を軽々と吹き飛ばす程の凄まじい勢いでした。団員は何とか津波が引くまでを耐えしのぎ、体制を整えた後、直ちに人命救助を行いました。流されたが廃材等につかまり奇跡的に助かった人、流出してきた家屋の中から助けを求める人、負傷して動けないでいる人…。『とにかく一人でも多く助けたい！』団員は自分の家族の安否や自宅の状況等の確認は二の次にして必死に行動しました。

発災から時間が経過するにつれて、各消防ポンプ自動車無線からの報告で被害状況が明らかになり、地元消防署を除く、自衛隊及び警察署等の防災関係機関も被災しており、応援体制の目処が立たないとのことで、まさに孤軍奮闘の状況下にありました。その間にも死傷者の報告数が増えていき、浸水区域の悲惨さと、被災して低下した消防団の機動力だけでは人命救助と行方不明者の捜索は厳しいものでありました。

一方、町内小中学校等に避難してきた住民の中には負傷者や病気による在宅患者が多数おり、消防署の要請や独自の判断により消防ポンプ自動車と病院に救急搬送を行いました。夜になると救急搬送の要請が増えましたが、避難者の協力を得て何とか乗り切ることができました。

また、隣接のJX日鉱日石コンビナート基地内で火災が発生し、敷地内のガスタンクが爆発する恐れがあるとのことで、当該施設から半径2km以内の区域に緊急避難指示が発令され、その避難広報と誘導も行いました。



危険を顧みず流出家屋内を捜索（花洲浜地内）



3.11大津波来襲（菖蒲田浜地内15時50分頃）



行方不明者捜索（花洲浜地内）

今振り返りますと、発災初日から3日目までは消防団員全員が不眠不休で活動し、食糧も乏しかったことから、人間の限界を超えていたと思います。中には家族が犠牲になっている、あるいは行方不明である、といった状況でも気丈に任務を遂行している団員もいて、その心労は計り知ることができません。

それから何と言っても、今回の活動中に2名の消防団員が犠牲になったことが痛惜この上なく、御遺族の悲しみを思うと申すべき言葉がありません。しかしながら、危険を顧みず行動したその不屈の消防精神は七ヶ浜町の消防史上に長く留められ光輝くものと信じております。

最後になりますが、我が七ヶ浜町消防団と同様に被災された自治体の消防団員の方々におかれましても、まだまだ厳しい現実が続くことかと思いますが、消防団活動の本質である「わが町を災害から守る」という使命感を再認識して、どんな困難でも揺るがない強い絆で、確実に前に進むことを共に誓うことで、この結びと代えさせていただきます。